

日本臨床教育学会 第13回研究大会開催要項 (第2次案内)

1. 大会日程

＊理事会：2023年10月27日（金）15:00～17:00

＊1日目：2023年10月28日（土） 9:30～17:20

9:30	10:00	12:00	13:00	15:00	15:20	17:20
受付	自由研究発表（A） 一般研究	休憩	課題研究 I・II・III・IV	休憩	全体講演	

シンポジウムIの終了後、新さっぽろアーキシティホテルにて情報交換会を行います（要予約）。

＊2日目：2023年10月29日（日） 9:00～15:50

9:00	9:20	10:30	10:50	12:50	13:50	15:50
受付	総会	休憩	シンポジウム (学会企画)	休憩	自由研究発表(B) 実践事例研究	

2. 会場（現地参加・オンライン参加のどちらでも可能）

札幌学院大学 新札幌キャンパス

〒004-8666

札幌市厚別区厚別中央1条5丁目1-1



札幌学院大学アクセス情報



3. 会長挨拶

子ども理解を深め「新たな協働の芽」を温める大会に

日本臨床教育学会会長
庄井 良信（藤女子大学教授）

日本臨床教育学会第 13 回大会が、北海道の札幌学院大学を会場に開催されます。北海道での大会の開催は 4 年ぶりになります。前回はコロナ禍以前の開催でしたが、今回はコロナ禍を経た開催となります。コロナ禍を経てもなお、コロナ禍はすでに終わったとはいいがたい日々は続いています。4 年前には、人びとの生活の中に当たり前のようであった社会の日常の関係性が希薄になりました。孤立感と不安感を抱えて、寄る辺ない暮らしをせざるを得ない子どもや大人たちも増えました。

また、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから 500 日を超えました。世界各地で戦禍と緊張がつづいています。この擾乱は、その現地で暮らす人々の当たり前の日常と、尊厳ある人びとの生活世界を激変させました。いま、そこに生きる人びとの声を聴き、子どもの声を聴き、その生活世界に思いを寄せながら、改めて人間発達援助とは何か、という問いを探究することが急務です。今大会の全体講演では、ポーランドから丸山美和さんをお招きし、貴重な経験を聴く機会を得ました。

日本臨床教育学会も設立 12 年を迎えます。今回の大会も、昨年に引き続いて、臨床教育学のこれまでとこれからについて語り合います。特に今回は、子ども理解の実践から紡ぎ合う発達援助職の人びとの協働（多職種協働）に焦点を絞って、臨床教育学の足跡と展望について探究します。そのために、開かれた対話（オープンダイアログ）の精神を大切にしたセッション方式のシンポジウムも企画されています。学会の共同研究を推し進めながら、その成果を公刊（出版）する可能性も探ります。

今回の大会開催をお引き受けいただいた、会場校の札幌学院大学（北海道）の皆様、大会現地実行委員会の皆様、そして学会事務局の皆様に、深く感謝申し上げます。この大会では、課題研究、自由研究でも魅力的な研究発表が数多くあります。この第 13 回大会に、ぜひご参加くださいますようお願い申し上げます。

4. 大会実行委員長挨拶

日本臨床教育学会第13回研究大会実行委員長 井上 大樹（札幌学院大学）

このたび、日本臨床教育学会第13回研究大会の会場校を引き受けることになりました。例年より人も時間も限られた条件の中、今春よりやっと感染症対策の規制が大幅に緩和された中、せっかくの対面の機会を逸することは臨床教育学の醍醐味を損ない、会員同士のつながりを薄めることにほかならず、このことだけはあってはならないという一念を理事会事務局と共有し、最低限ではありますが対面・オンライン双方の条件を整えた次第です。

コロナ禍の真の収束の見通しが立たない中、子ども・若者たちを取り巻く環境、特に教師などの大人が個々に粘り強く関わり続けることがますます難しくなっており、「困っている」子どもたちの存在が地域社会ではますます「見えづらく」なっています。このような状況の中、日本臨床教育学会をはじめ、各地の臨床教育学会・研究会では、発達援助職がかれら一人ひとりの声に耳を傾け、伴走し、学びや成長への一歩に踏み出すまでの実践を掘り下げ、教師などの発達援助職の在り方を見直す論議を積み重ね、時には孤軍奮闘する実践者を応援していきました。これらの取り組みはDXによる個別最適化なる幻想に拠らなくても、日々の子ども・若者たちとの関わりから希望を見いだす術を私たちこそが学んできたとも言えるのではないのでしょうか。

コロナ禍に相前後して日本では、児童福祉法制をはじめ、生徒指導提要にすら子どもの権利の尊重が明記され、子どものVIEWに基づいた発達援助が新しいスタンダードとして求められ、すでにブラック校則の是正は教育委員会のトップダウンで展開される時代になりました。また、ヤングケアラーに対する調査及び支援の整備がはじまっています。北海道は消滅可能性の高い市町村を多く抱えていますが、「自治体サバイバル」の鍵は子どもや子育て家庭の定着であることから、医療費や給食の無償化や学習支援の充実などあらゆる子ども支援、子育て支援が急ピッチで整備されています。つまり、地域存続のためにも子ども・若者の生きづらさに大人たちが向き合い、（直接、間接にも）手を差し伸べることができるかが喫緊の課題になっているのです。この課題に十分に応え得るのが臨床教育学であり、今大会を含む今後の議論に大きな期待を寄せ、会場校挨拶と代えさせていただきます。対面、オンラインに関わらず皆様のお越しを心よりお待ちしております。

5. 大会実行委員会

実行委員長	井上 大樹（札幌学院大学）
実行委員	村澤 和多里（札幌学院大学）
	川原 茂雄（札幌学院大学）
	池田 考司（北海道教育大学）
	太田 健斗（北海道教育大学大学院生）
	今野 邦彦（藤女子大学）
	庄井 良信（藤女子大学）
	庄井 真美（札幌市地域開放図書館司書）
	治部 雄都（札幌市中学校教員）
	船津 悠斗（札幌市小学校教員）
	間宮 正幸（共育の森学園）
	村越 含博（北海道文教大学）
	守屋 淳（北海道大学）

6. 開催方法

- * 札幌学院大学新札幌キャンパスを会場として対面での開催を基本としています。ただし、遠隔参加や感染症予防などの社会状況を踏まえ、ZOOMによるオンライン参加も可能な体制を取っています。
- * 参加申し込み時には、現地参加・オンライン参加のいずれかの方法を選択してください。

7. 大会参加費

- * 大会参加費は、下記の通りです。
一般：5,000円 学生・院生：2,000円（現地参加もオンライン参加も同額です。）
- * キャンセルされた場合の返金はいたしません。大会運営費とさせていただきます。
- * 大会には、会員以外の方でも、上記の参加費でご参加いただけます。

8. 参加申し込みについて

- * 大会参加に関しては、**事前申し込み制のみ**とさせていただきます。
- * **申し込み期限：2023年10月14日（土）締め切り**
- * 大会参加の申し込みと参加費の入金は、イベント管理ツール「Peatix」にて行います。
申し込み時に、現地参加かオンライン参加かを選択して、チケットを購入（申込）してください。
- * なお、現地参加の場合、宿泊、昼食に関しては、各自で対応をお願い致します。大学周辺には、昼食場所、コンビニ等があります。ホテルは、新札幌駅周辺や札幌駅周辺にあります。
- * 情報交換会は、10月28日（土）18時より新さっぽろアーキシティホテルにて開催します。情報交換会への参加を希望される方は、チケット購入の際に情報交換会付きのチケットをお申し込みください。ただし、情報交換会の参加者が50名に到達次第、情報交換会付きのチケットの販売を打ち切らせていただきます。

JR 新札幌駅改札口から新さっぽろアーキシティホテルまでのルートはこちら



- * 「発表要旨集録」は、事前申し込みのあった方のメールに添付ファイルでお送りします。
- * 「Peatix」による申し込み方法は、別添資料をご参照ください。

9. 自由研究発表の区分・発表時間について

【一般研究と実践事例研究の区分】

A：一般研究

臨床教育学の研究や実践の発展に関する一般的な学術研究を募集します。子ども理解、障がい児・者の理解・支援、教育実践、幼児教育・保育、若者自立支援、教師教育、教師の専門性、人間発達援助、教師・援助者の課題・困難性、若手教師・援助者の自己形成、心の傷とケア、子ども・若者の身体、教育思想・教育実践史などの領域がこれまで報告されています。

B：実践事例研究

学校や福祉施設、医療・援助に携わる諸機関、NPO・NGO など、地域における一回性の教育実践や発達援助実践を、研究者と実践者が互いの立場を尊重しながら対等の関係で学びあい、新たな問いや学問研究の端緒を創発することをめざします。教育現場はもとより、心理、福祉、保育、養護、保健、療育、医療・看護、行政など、さまざまな領域の、あるいは領域を越えた発達援助実践に関わる研究を募集します。発表経験の有無は問いませんが、場合によっては、発表形式の確認をすることがあります。

※ A・Bともに、学会事務局において申し込まれた発表内容を考慮したうえで、大会時の分科会を組織いたします。

【発表時間】

A：一般研究は、発表 20 分、質疑応答 5 分です。

ただし、共同研究で発表者が複数の場合は、発表 40 分、質疑 10 分とします。

B：実践事例研究は、1 報告 60 分（概ね発表 40 分、質疑応答 20 分）となります。

発表者が複数の場合でも 1 報告 60 分です。

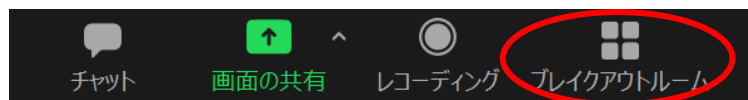
10. 発表・提案に関するお願い

【参加される皆様へ】

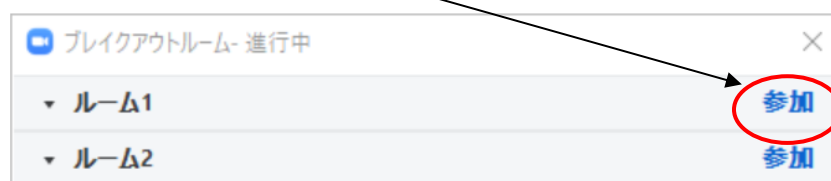
- 1) 発表要旨集録は大会の1週間前までに、司会者・発表者・参加申し込みをされた方々にメールで配布いたします。
- 2) Zoom の利用時に、登録氏名が異なる場合がございます。その際は、ご本人の氏名に変更していただきますようお願いいたします。
- 3) 発表中、司会者・発表者以外の参加者は、Zoom のビデオ及びマイクをオフ（ミュート）にしてください。インターネット回線の負担軽減が目的ですので、ご理解をお願いします。なお、会場によって司会者からオン・オフの指示がある場合は、上記の限りではありません。
- 4) 質疑応答においてご発言される方は、ビデオとマイクをオンにしてください。
- 5) 自由研究発表・課題研究においては、「ブレイクアウトルーム」機能を用いて分科会場を設定します。はじめに、司会者・発表者を優先的に振り分け、事前打ち合わせをしていただきます。参加者は、開始時間の5分前を目安に、参加したい分科会を選び、会場を移動してください。移動方法がわからないときは、運営者がサポートいたします。

【ZOOM 上での会場移動の方法】※PC 版を参考

- ① 同時時間帯に複数の会場がある場合、移動に際しては、画面上の「ブレイクアウトルーム」をクリックすれば、開設中の会場を選択する画面が開きます。



- ② 各会場の横にある「参加」をクリックすると、希望する会場の画面に移動します。

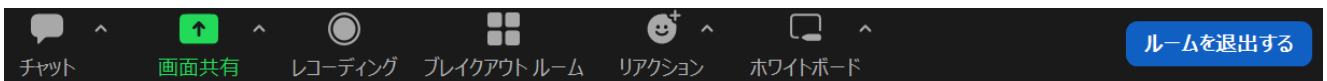


【注意】 会場（ブレイクアウトルーム）の自由選択は、アプリケーションのバージョンが古いと機能しないため、あらかじめ最新版のアップデートをお願いします。

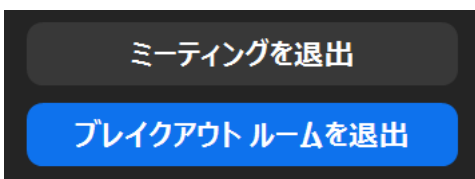
6)「ブレイクアウトルーム」を開設している間は、会場担当がそれぞれの分科会に参加しています。問題が生じた場合は会場担当者、あるいはメインルームの ZOOM 担当者にチャット機能などを通じてお伝えください。

7) 自由研究発表及び課題研究においては、討議が終わりましたら、会場ごとに休憩あるいは解散とします。

すべての会場が終了したことを確認したのち、ZOOM 担当者が「ブレイクアウトルーム」を解除いたします。解除すると、すべての ZOOM 参加者が自動的にメインルームに戻ります。それを待たずに、ご自身でブレイクアウトルームを退出する場合は、下記をご参照ください。



ブレイクアウトルームから退室する場合は、「ルームを退室する」をクリック  してください。下図の画面に切り替わりますので、都合に合わせて退出してください。



← ZOOM を終える場合は、こちら

← ZOOM は終えず、メイン画面に戻る場合はこちら

8) 発表に際しては、ZOOM の「画面共有」が有効となっています。発表要旨集録以外の提示資料がございましたら、発表者自ら「画面共有」にて提示してください。

なお、発表または提案においては、日本臨床教育学会の＜倫理規程＞を遵守してください。特に、個人情報の保護を徹底してください。

【自由研究発表及び課題研究における司会者・発表者の皆様へ】

1)「自由研究発表(A)一般研究発表」の司会者及び発表者の皆様は、10月28日(土) 9:40に各会場に集まるか、ZOOMにアクセスしてください。開始5分前までに司会者との顔合わせや提示資料の確認、動作確認などを行います。

各発表につき、発表時間 20 分、質疑応答 5 分です。すべての発表が終了しましたら、部会ごとに 20 分程度の全体討議を設けたのち、会場ごとに閉会してください。

2)「自由研究発表(B)実践事例研究発表」の司会者及び発表者の皆様は、10月29日(日) 13:30に各会場に集まるか、ZOOMにアクセスしてください。開始5分前ま

でに司会者との顔合わせや提示資料の確認、動作確認などを行います。

各発表につき、発表時間 40 分、質疑応答 20 分です。すべての発表が終了しましたら、会場ごとに閉会してください。全体討議は設けませんが、残り時間があれば、行っていただいても差し支えありません。

- 3) 課題研究及びシンポジウムの司会者・発表者の皆様は、それぞれの開始時間 15 分前までに各会場に集まるか、ZOOM にアクセスしてください。

課題研究及びシンポジウムの司会者・発表者のうち、ZOOM で参加される方は、直前の打ち合わせにおいてブレイクアウトルームを設定することがあります。その際は、担当の指示に従っていただきますようお願いします。

- 4) 発表に際しては、ZOOM の「画面共有」が有効となっています。当日提示する資料がございましたら、発表者自ら「画面共有」にて提示してください。なお、発表内で触れる第三者の個人情報保護を徹底してください。

***ZOOM 参加者に対して資料配布が可能な場合は、当日チャットに添付してください。**

- 5) 現地で発表される方は、当日提示する資料が配布可能であれば、対面参加者用に各自印刷してご持参ください。

***印刷部数の目安は、自由研究発表 20 部、課題研究 30 部、シンポジウム 80 部です。**

***当日パワーポイントなどで資料を提示する場合は、各会場にパソコンがありますので、USB を持参してください。**

- 6) 課題研究やシンポジウムにおける発表者の発表時間や提案順序につきましては、それぞれ異なりますので、各担当理事を中心に事前に確認し合っておいてください。また直前にも確認し合ってください。

- 7) 自由研究発表、課題研究、シンポジウム、それぞれについて、記録を残させていただきます。そこで、**各会場の司会者あるいは参加者の中から「記録者」を決めていただきますようお願いいたします。**

記録者は、なるべく会員の方をお願いしてください。大会後、司会者の方に記録者についてお伺いします。その際、記録者の方の氏名、メールアドレスをご教示ください。後日、事務局から記録者に連絡をいたします。

記録者の方は、各会の内容を踏まえた 1600 字程度の記録を事務局に提出していただきます。この記録は、学会通信に掲載させていただきます。

11. 大会会場一覧

10月27日（金）：理事会（15時～17時） 4階 410



※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は分科会終了後に原状復帰をお願いします。

※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

10月28日(土): 自由研究発表(A) 一般研究(10時~12時) 4階

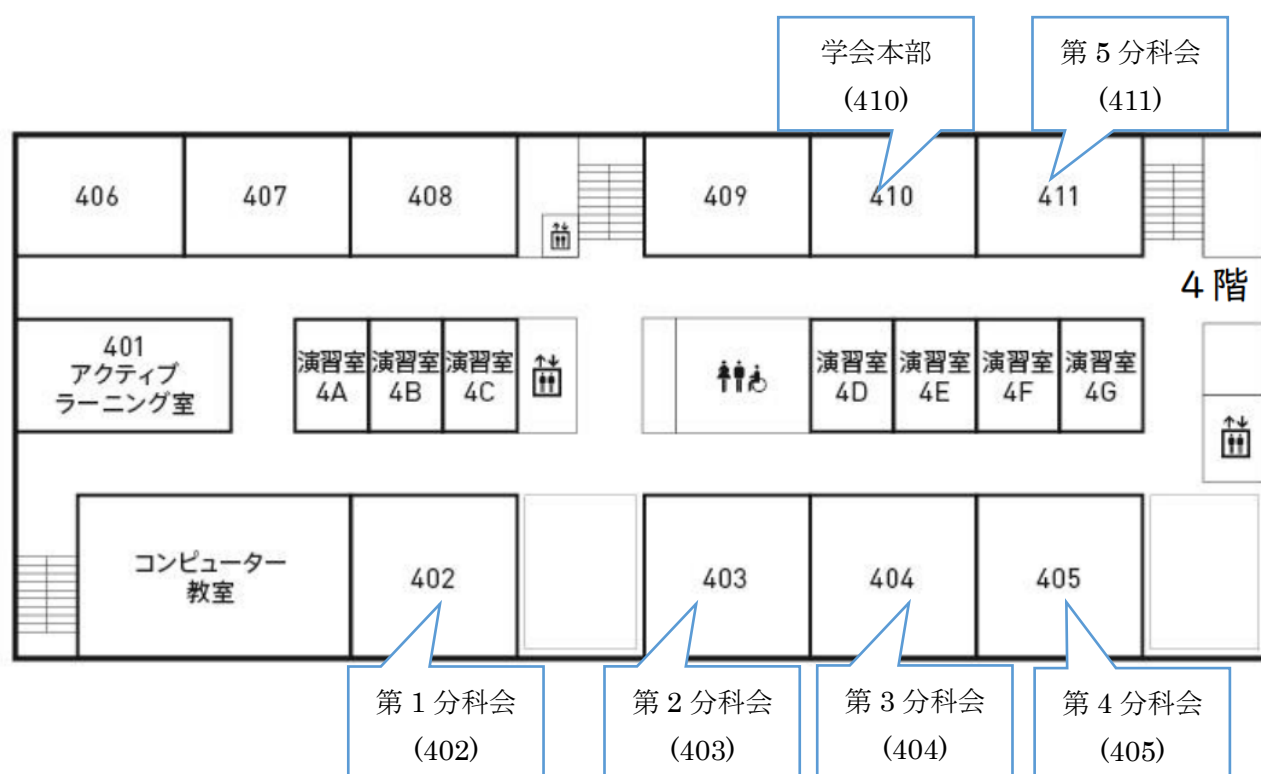
第1分科会 4階 402

第2分科会 4階 403

第3分科会 4階 404

第4分科会 4階 405

第5分科会 4階 411



※ 大会受付は3階304教室の前となります。ここで参加証(名札)をお渡しします。

※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は分科会終了後に原状復帰をお願いします。

※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

※ 411教室は12時30分に施錠いたします。ご協力をお願いします。

※ 会場での食事は、402・403・404・405教室、1階のカフェテリアにてお願いします。

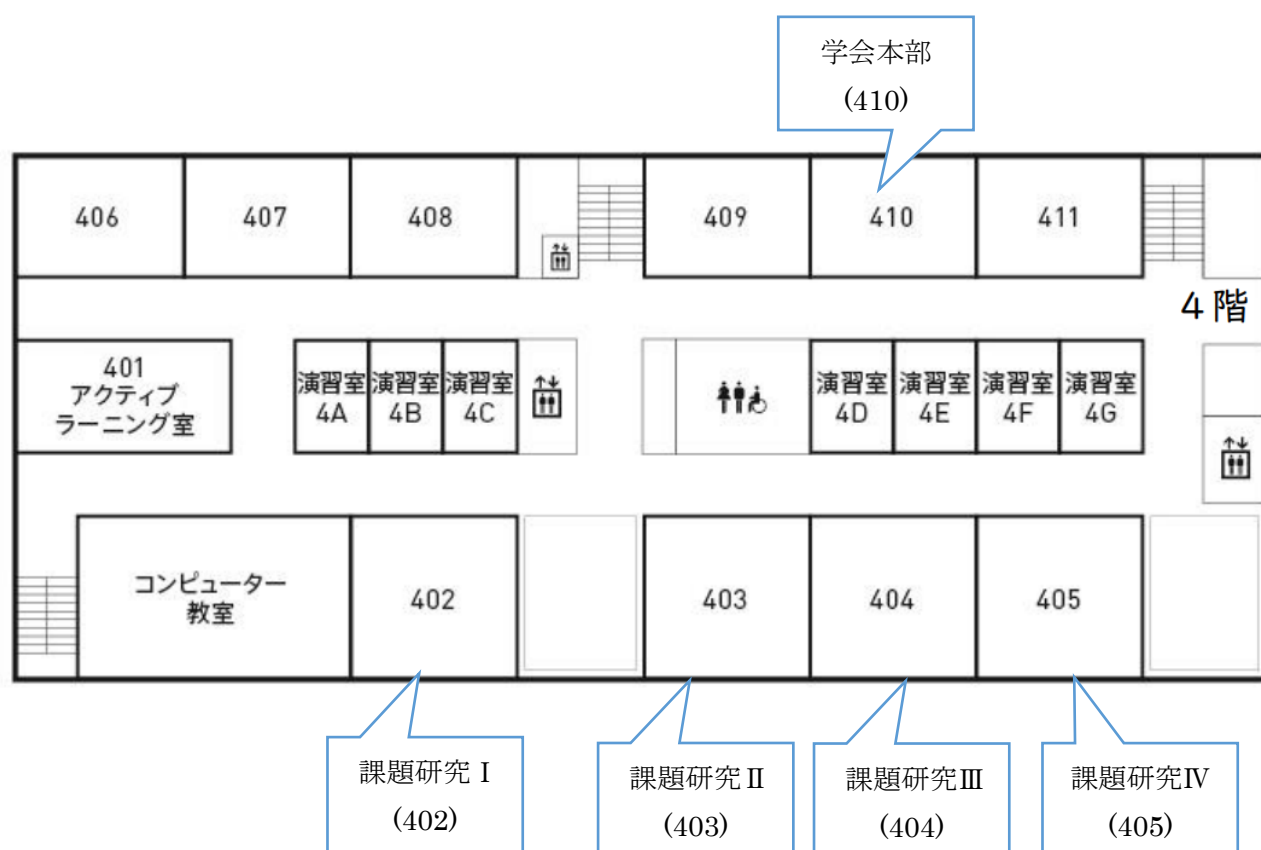
10月28日(土): 課題研究(13時~15時) 4階

課題研究Ⅰ 4階 402

課題研究Ⅱ 4階 403

課題研究Ⅲ 4階 404

課題研究Ⅳ 4階 405



※ 大会受付は3階304教室の前となります。ここで参加証(名札)をお渡しします。

※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は分科会終了後に原状復帰をお願いします。

※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

※ 402・403・404・405教室は15時30分に施錠いたします。ご協力をお願いします。

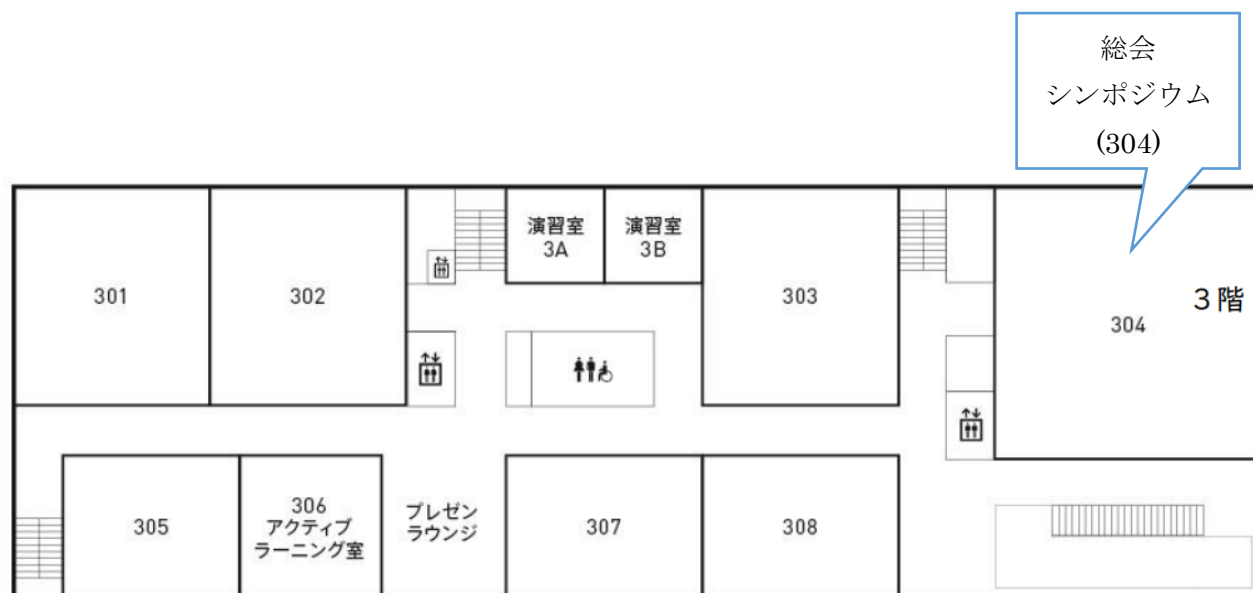
10 月 28 日（土）：全体講演（15 時 20 分～17 時 20 分） 3 階 304



※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

※ 304 教室は 17 時 40 分に施錠いたします。ご協力をお願いします。

10 月 29 日（日）：総会（9 時 20 分～10 時 30 分）
シンポジウム（10 時 50 分～12 時 50 分）
3 階 304



※ 大会受付は 3 階 304 教室の前となります。2 日目からご参加の方は、ここで参加証（名札）をお渡しします。

※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

※ 会場での食事は、304 教室、あるいは 1 階のカフェテリアにてお願いします。

10月29日(日): 実践事例研究 (13時50分～15時50分) 4階

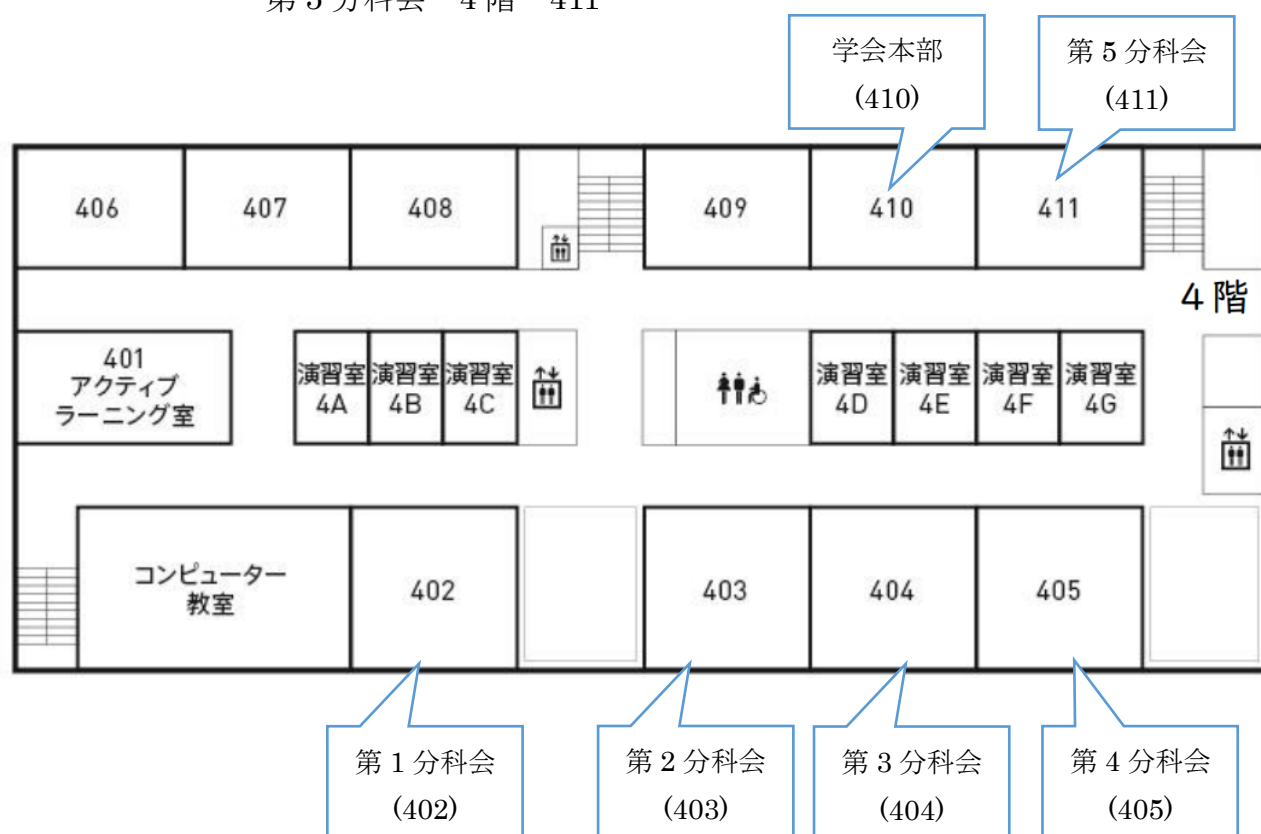
第1分科会 4階 402

第2分科会 4階 403

第3分科会 4階 404

第4分科会 4階 405

第5分科会 4階 411



※ 大会受付は3階304教室の前となります。2日目午後から参加される方は、ここで参加証(名札)をお渡しします。

※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は分科会終了後に原状復帰をお願いします。

※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

※ 各教室は16時10分には施錠いたします。ご協力をお願いします。

12. プログラム

1日目 10月28日(土)



9:30～ 受付開始

10:00～12:00 自由研究発表(A): 一般研究

13:00～15:00 課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

15:20～17:20 全体講演

18:00～20:00 情報交換会



自由研究発表（A）：一般研究
10月28日（土）10：00～12：00

第1分科会

子ども理解の実践的・研究的模索

司会：田淵 久美子（活水女子大学）
平野 拓朗（鹿児島大学）

10：00～10：25

＊ ICT を活用した子ども理解を深めるための記録のあり方

影浦 紀子（松山東雲女子大学）

10：25～10：50

＊ 外国につながる子どもの支援を考える

柴田 久美子（札幌子ども日本語クラブ）

10：50～11：15

＊ 「子ども理解」の視座としての「個のリアリテ」

—秋田・佐々木昂のリアリズム綴方教育論の再読から—

土屋 直人（岩手大学）

11：15～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月28日（土）10：00～12：00

第2分科会

教師の専門性と実践思想

司会：佐藤 隆（都留文科大学）
吉岡 眞知子（東大阪大学）

10：00～10：25

＊ 教育実習における体験のエピソード記述法による省察

太田 建斗（北海道教育大学大学院）

10：25～10：50

＊ 小学校教師の専門性を考える
－小学校教師の経験から理論への思索－

北川 健次（相愛大学）

10：50～11：30（※ 共同研究で発表者2名のため発表時間40分）

＊ 環境教育実践を支える教師の専門性

－「子ども」「地域」「可能性」－

○ 中妻 雅彦（東京自治問題研究所）

○ 谷保 裕子（福井県若狭町立三方小学校／慶応義塾大学大学院）

11：30～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月28日（土）10：00～12：00

第3分科会

当事者の主観世界への着目

司会：高口 僚太郎（長岡技術科学大学）
三好 伸子（金沢星稜大学）

10：00～10：25

- ＊ 地域の中で共に生きる援助者による相談活動の多様性
～トモさんへのライフストーリー・インタビューから～
田中 弘美（札幌市厚別区保健福祉部健康・子ども課）

10：25～10：50

- ＊ 「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく
第6報 宇佐美さんへのインタビューから
松田 康子（北海道大学教育学研究院）

10：50～11：15

- ＊ 保育所における創造世界の協同的な構築と保育者の学び
：プレイワールド研究の視座から
渡辺 涼子（常葉大学）

11：15～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月28日（土）10：00～12：00

第4分科会

発達援助専門職としての問いと協働

司会：氏家 靖浩（仙台大学）
久保田 治助（早稲田大学）

10：00～10：25

- ＊ 中学校区で児童・生徒の9年間の育ちを支える
ー施設分離型小中一貫・連携の意義、成果と課題ー
加藤 恵美子（桃山学院教育大学）

10：25～10：50

- ＊ 小学校における教員と特別支援教育支援員の連携の在り方
ーエピソード記述法による検討ー
木村 光男（常葉大学）

10：50～11：15

- ＊ アンリ・ワロンの発達教育思想を日本の臨床教育学にどう生かすか（7）
ー教育実践・心理臨床などにおけるワロンの治療的教育学の貢献ー
○ 間宮 正幸（学校法人「共育の森学園」）
亀谷 和史（日本福祉大学）
今野 邦彦（藤女子大学）

11：15～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月28日（土）10：00～12：00

第5分科会

臨床教育学の試みと構築

司会：川俣 智路（北海道教育大学）
山内 清郎（立命館大学）

10：00～10：25

＊ 未完成な説明を知的探究へ向かわせる契機

一図形領域の課題解決過程における対話に着目して一

治部 雄都（札幌市立北辰中学校）

10：25～10：50

＊ 日本における Hospital Play Specialist 養成教育の効果に関する検討

松元 圭（関西大学 / NPO 法人ホスピタル・プレイ協会）

10：50～11：15

＊ 静止画像を用いた現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発

宮原 順寛（北海道教育大学大学院）

11：15～12：00

全体討議



10月28日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅰ：現代の子どもと子ども理解

子ども理解の深化に向けて、子どもの生きづらさの根源を問う 第1回 セクシュアル・マイノリティの子どもの生きづらさ

報告1：性の多様性の尊重における学校教育の現状と課題

片岡 洋子（千葉大学名誉教授）

報告2：多様な性を生きる子どもたちのリアル

—LGBT ユースの居場所「にじいず札幌」の実践から—

国見 亮佑（にじいろほっかいどう理事長）

<趣旨>

これまで本課題研究では、乳幼児期に焦点を当て、臨床教育学的な子ども理解と援助者のありようについて検討を重ねてきた。その蓄積を踏まえ今回から、「子ども理解の深化に向けて、子どもの生きづらさの根源を問う」というテーマを掲げ、検討を進めていきたい。

保育や教育の場において、さまざまな「問題」が山積している。それに対し、表面的な理解や原因論があてはめられ、親、本人の問題に還元されていくことが多い。今、改めて子ども観や人権意識、学校や保育現場の認識が問われている。ここでは不登校や障害児教育、ジェンダーなど、子どもをめぐる課題を深く検討することを通して、子どもの生きづらさをもたらす共通の根源を見出し、今後の展望を共有していければと考えている。

親や本人に還元できない問題の一つに、性的マイノリティの子どもの生きづらさがある。性的マイノリティの子どもたちは、心と身体の性別が一致しているシスジェンダーかつ異性愛である人々だけを前提にした教育や文化で成立している学校の日常生活そのものに苦しめられている。「男女に分かれて」と呼びかけ、「思春期になると異性に関心が芽生える」と学習指導要領「保健」に明記していることが象徴するような学校教育の生徒指導、カリキュラムは、心と身体の性別が一致しない子どもや、非異性愛者の子どもに、「あなたは間違っている」というメッセージを与え、自己肯定感を剥奪してしまう。

性的マイノリティの子どもたちの生きづらさは何によって、どのようにもたらされているのか。学校教育に何が問われているのか。性的マイノリティの子どもたちだけでなく、すべての子どもが性の多様性を理解し、性的アイデンティティを自由に形成していける教育のありかたを考える。

司会：筒井 潤子（都留文科大学）

影浦 紀子（松東雲女子大学）

10月28日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅱ：子ども・若者の育ちや自立を支える地域からの共同

社会的包摂を意識した中学生支援の試み
ー別室登校とデイサービスでの実践ー

報告1：別室登校調査から見える課題と可能性

ー札幌市「相談支援パートナー」制度の現状から考えるー

池田 考司（北海道教育大学）

報告2：社会的包摂を意識した中学生支援の試み

ー別室登校での実践ー

岡田 直也（札幌市立篠路中学校・校長）

報告3：不登校の子どもへの支援

ー第3の居場所としての放課後等デイサービスー

古家 好恵（社会福祉法人麦の子会）

<趣旨>

昨年の第12回研究大会では、「高校生の居場所を学校と地域でつくる試み<居場所カフェ>から、子ども・若者の育ちを支える共同を考える」というテーマで高校生の支援を中心に検討を行ったが、本大会では、別室登校に焦点を当て、時期は義務教育段階の中学生にしたい。

不登校の児童生徒の増加は、深刻な状況にあり、特に中学生は、2021（令和3）年度の不登校生徒数が16万3442人となっている。そのような中、不登校の周辺に、別室登校の生徒が相当数いることがわかってきた。

文部科学省が今年3月31日に発表した「誰一人取り残さない学びの保障に向けた不登校対策について（COCOLOプラン）」の中でも「校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）」とネーミングされた別室登校への対策が位置づけられた。

池田考司と間宮正幸が今年2～3月に行った札幌市内17校の中学校調査では、不登校生徒数の半数近い数の別室登校生徒がおり、多くの学校で、社会的包摂の観点から別室登校を重視した取り組みが行われていること、社会福祉法人や若者支援センター等外部機関との連携が試みられていることが明らかになった。

本課題研究では、上記の中学校調査を行った研究者、不登校・別室登校について社会的包摂の観点から実践を行っている中学校校長、中学校と連携して中学生をデイサービスの場で発達支援している社会福祉法人のスタッフに報告してもらい、中学生に対する支援の方向について検討を行いたい。

司会：富田 充保（相模女子大学）

伊田 勝憲（立命館大学）



10月28日（土）13：00～15：00

課題研究Ⅲ：発達援助実践と発達援助専門職

発達援助専門職の専門性を再考する（1）

— 日常の問題意識と協同的な学び —

報告 1：自主ゼミでの読書会を中心とした人間発達援助の協同的探究（仮）

武庫川女子大学 自主ゼミ

報告 2：「学ぶことは生きること」への視座

— 文化と言葉の間から —

川瀬 弘樹（学校法人 HIRO 学園）

＜趣旨＞

今これまで、課題研究Ⅲにおいては発達援助専門職あるいは人間の発達そのものに注目しながら、それらに携わる実践者や研究者とともに発達援助の可能性を探る学びあいを重ねてきました。「人間発達援助」という概念は多様な意味を含んでおります。一つの分野において、そこでの問題意識に端を発し、問題・課題を深掘りすることも必要なことではありますが、多職種連携や世代間交流、または領域を越えた学際的研究においては、多様な立場からの知見・発想に触れ、その視野を広げることも必要となります。発達援助専門職は、多様な立場から自らの問題意識を見つめることにより、目の前の当事者理解を深め、真相に近づくということがあります。昨年度の課題研究では「北大ワロン研究会」が蓄積してきた発達援助専門職の協同的な学びに注目しました。そこでは、まさに発達援助専門職の協同的な学びあいを実現しており、このような場の重要性を提示していただきました。

今回の報告の一つは、昨年の流れを汲みながら、発達援助専門職の協同的な学びの一例として武庫川臨床教育学会における自主ゼミの活動に注目いたします。それぞれの立場にある者が、じっくりと考えあい、互いの思いや意見を交わすなかで、それぞれの問題意識が有機的に働きあうことは、多職種連携や多世代共同の土台となるのではないのでしょうか。こうした学びあいに、学会として学ばねばならないとも思います。自主ゼミに参加する人々がゆるやかに形づくってきた学びあいの場において、「じっくりと考える（熟考する）」ことの意味、継続されるゼミナールの学習の意義について語りあいます。

もう一つの報告では、近年注目されている日本における外国籍の子どもへの教育活動に焦点を当てます。外国籍の子どもは義務教育の対象外となっており、国際人権規約によって就学機会が確保されているものの、言語の違いや進学・就職指導などの面において厳しい現実があります。グローバル化や多様性が叫ばれるなか、国内における外国籍の子ども・若者が直面する問題は、これからの日本教育の課題を先取りしています。そこで、かれらの生き方の問いに向き合う現場からの報告をしていただきます。

司 会：吉益 敏文（豊岡短期大学）

渡邊 由之（東大阪大学）



10月28日（土）13：00～15：00

課題研究Ⅳ：教師の専門性の再検討

子どもに根ざす、地域に根ざす教師と学校

報告1：保健室から創る希望

—子どもに伴走する支援と学校教育—

山形 志保（北海道立高校養護教諭）

報告2：地域に根ざす「学校」とは

—「相」の関係づくり—

中山 晴生（北海道 江差北小学校）

コメント：福井 雅英（滋賀県立大学）

<趣旨>

新学習指導要領の実施と連動して、中央教育審議会から「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（2021）が出された。これを受けて、「令和の日本型学校教育を担う教師の在り方特別部会」が設置され、「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議まとめ」（2021）が公表されている。教員の養成、採用、研修を一体的に捉え、特に教員免許更新制度の廃止に伴う教師の学び、研修について提言がなされている。こうした教育政策の動向をどう捉えていけばよいのか。批判的な検討に留まらず、対人援助職としての教師の専門性について、私たちの実践を通して明らかにしていく意義は、より高まっている。

今次の課題研究では、①この間の政策動向の検討、②コロナ時代が3年目を迎えるなかで生じている学校・家庭・地域等における様々な課題を踏まえた教育実践のあり方、③対人援助職としての教師の専門性を高めるための校内研修のあり方を論点にして、報告と議論を深めたいと考えている。

司会：春日井 敏之（立命館大学）

佐藤 隆（都留文科大学）



10月28日（土）15：20～17：20

全体講演

ポーランドからみたウクライナ侵攻

講師：丸山 美和（ルポライター、ポーランド国立ヤギェロン大学非常勤講師、
クラクフ在住）

<趣旨>

ロシアによる軍事侵攻を受けるウクライナの人口支援に携わり、隣国ポーランドに避難する難民支援にも関わる丸山美和さんは、戦争という非人道的な被害の実相を当事者の視点から追いつけてきました。丸山さんの取材記事には、ウクライナの人々の生活感情や人生が滲み出ています。人道支援にも携わりながら、これまでインタビューをした数多くの人々の声を紹介していただきます。

ロシアによるウクライナ侵攻が私たちに突きつけるのは非常に重たく、人間存在に関わる重大事です。生きること、暮らすこと、未来を見据えること、苦難のなか助け合うこと、家族を悼むこと、他者を慮ること・・・発達援助における多くの命題が突き付けられるなか、それでも人間的関心を向け続けることを願って、皆さんと考えあえればと思います。

なお、当日はインタビューの方法論についても、臨床教育学の Narrative based approach と重ねながら語っていただきます。

2日目 10月29日(日)



9:00～ 受付開始

9:20～10:30 総会

10:50～12:50 シンポジウム

13:50～15:50 自由研究発表(B) 実践事例研究



10月29日（日）10：50～12：50

シンポジウム

発達援助職どうしの〈協働〉から生まれる臨床的な問い

基調報告：発達援助職の連携と協働—その臨床的な「問い」を考える

庄井 良信（藤女子大学・日本臨床教育学会会長）

パネラー：伊田 勝憲（立命館大学）

パネラー：影浦 紀子（松山東雲女子大学）

パネラー：沼田 あや子（白梅学園大学）

パネラー：富田 充保（相模女子大学）

パネラー：村澤 和多里・井上 大樹（札幌学院大学）

パネラー：田中 昌弥（都留文科大学）

〈趣旨〉

日本臨床教育学会が発足して12年目を迎える。これを契機に、会員相互の叡智を結集し、臨床教育学のこれまでとこれからについて共同研究を重ね、その成果を公刊（出版）する企画を進めたい。今回は、発達援助者どうしの多職種連携・協働から生まれる問いを立ち上げる対話的なセッションを実施したい。

設立当初から、日本臨床教育学会は、一貫して次の3つの問いを共有してきた。

1つは、多様で複雑な社会環境を生きる子どもの「存在」そのものに寄り添い、その理解を深め続ける発達援助の理論と実践とは何か、という問いである。それは、たとえば、他性（alterity）としての子どもと出会い直す、子どもの心の声を聴く、子どもの生活世界に触れる、子どもの尊厳と人権を尊重する、というような主題で探究されてきた。これは、昨年度の大会で考えた。

2つは、心理、福祉、司法、医療などの教育関連専門職の人々が、学校の教師と多職種で協働する中で、自己の専門性をどのように再考し、高めていけるのかという問いである。それは、多職種協働が必要な実践のなかで、スクールカウンセラー（SC）、スクールソーシャルワーカー（SSW）、スクールローヤー（SL）、医療職などの人々が、自らの発達援助の専門性をどのように問い直し、その質を高めていけるのかという問いであった。

3つは、前者の問いの「逆照射」である。困難を抱えた子どもの理解と支援のために、学校の教師が、心理職、福祉職、司法職、医療職などの人々と出会い、連携し、協働する中で、教職に求められる発達援助の専門性をどのように再考し、その向上を企図していくのか、という問いである。この問いは教師教育カリキュラムの改善という課題とも密接に結びついている。

今回のシンポジウムでは、特に2つめと3つめの視点に焦点を絞り、日本臨床教育学会12周年記念出版企画に必要な「多職種連携・協働」という論題について、問いを深め合うオープン・セッションを実施したい。

司会者：龍崎 忠（岐阜聖徳大学）

土永 葉子（帝京平成大学）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月29日(日) 13:50～15:50

第1分科会

教育・学校が支えうる子どもの育ちとは

司会：富樫 千紘（和光大学）
廣瀬 雄一（鳴門教育大学）

13:50～14:50

- ＊ 不登校と言われる生徒を少しでも減らすために
一現場の教師ができること一

川元 藍（札幌市立札幌北中学校）

14:50～15:50

- ＊ どんな子どもも受け入れられ卒業まで過ごせる高校とは

浦田 直樹（秋桜高等学校）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月29日(日) 13:50～15:50

第2分科会

子どもの目線から教育現場を問い直す

司会：本田 伊克（宮城教育大学）
村越 含博（北海道文教大学）

13:50～14:50

＊ 子どもを寿ぐ学校を
ー子どもに応える教師として生きてー

石本 日和子（相愛大学）

14:50～15:50

＊ オンライン学習の取り組みから
ー保護者との連携ー

岡本 恵子（三重県公立小学校）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月29日(日) 13:50～15:50

第3分科会

子どもの生活に根ざし「生きる」教育実践

司会：荒井 嘉夫（東京電機大学）
泉 宜宏（都留文科大学）

13:50～14:50

- ＊ 地域の自然と暮らしを綴る『こどもフィールド・ノート』の可能性
—「都留フィールド・ミュージアム」構想に根差した実践の試み—
北浦 貴之（山梨県都留市立宝小学校）

14:50～15:50

- ＊ 小学校道徳科における子どもが学校を社会と見なしながら生きる教育実践
船津 悠斗（札幌市立小学校）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月29日(日) 13:30~15:30

第4分科会

教育者が子ども・若者とともに学び深めるということ

司会：高橋 亜希子(南山大学)
沼田 あや子(白梅学園大学)

13:50~14:50

- * 生活困難を抱える高校生への校内支援の実際
ー教員への聞き取りを中心に多職種協働を考えるー
村澤 博美(公立スクールカウンセラー)

14:50~15:50

- * 「教育方法論」における多様な学びから、学生に意識の変容を探る
増田 修治(白梅学園大学)



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月29日(日) 13:50~15:50

第5分科会

病児の遊びを保障する「ホスピタル・プレイ」の実際

司会：首藤 貴子（愛知産業大学短期大学）
渡邊 由之（東大阪大学）

13:50~14:50

＊ 病児の治療を支えるホスピタル・プレイの実際

松平 千佳（静岡県立大学短期大学部／NPO 法人ホスピタル・プレイ協会）



【第 13 回研究大会に関する問い合わせ先】

日本臨床教育学会事務局

〒577-8567

大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1 東大阪大学 渡邊由之研究室

E-mail : crohde2011@yahoo.co.jp